

自然体験が育む幼児の生きる力の育成

—森の幼稚園での活動を通して学ぶこと—

金子 仁

はじめに

幼稚園教育要領第1節のねらい及び内容の考え方と領域の編成の中で、幼児期は、生活の中で自発的・主体的に環境とかかわりながら直接的・具体的な体験を通して、生きる力の基礎となる心情・意欲・態度などを身に付けていく時期であるから、幼稚園教育においては、このような幼児の特性を考慮して、生きる力の基礎となる心情・意欲・態度などがそれぞれの幼児の中に培われるようにすることを具体的な目標として捉える必要がある。と記されているように幼児が健やかな成長をするために必要とされる生きる力の育成が必要不可欠と言われている。高度経済成長により各家庭における生活環境の水準は格段に上昇し、その恩恵は幼児においても十分に受けていると考える。むしろその恩恵を受けることにより社会環境に大きな変革がもたらされている。具体的に言うと様々な生活環境の効率化が図られ便利な生活が当たり前になってきていることにより、我々人間は考えて創意工夫するという行為があまり必要なくなってきたのではないだろうか。日常生活における電気や水道、移動手段におけるまで、スイッチやボタン一つでことが済むような現状である。生きる力とは「自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」とある。便利な現代社会環境の中では自ら考え工夫し、主体的に行動するということの必要性がなくなっているように感じる。いやむしろそのような行動をしなくても十分生活していけるので考える必要がないのである。

また、幼児に対して就学前の時点で学校へ入学

した時の困難を避けるために早期教育を取り入れ教科的な学びをさせようとする傾向も少なくない。目に見える部分において～ができる。～がわかる。などと小学校へ行って困難を経験しないように対策を講じるという幼児教育機関や保育機関も多いのではないだろうか。幼児を持つ多くの保護者の要望もそのような流れになってきているのは間違いないだろう。しかし、小学校で困難に遭わないように幼児期から対策を講じるよりも、その困難にであった時、困難に立ち向かうことができる力を身に付けていくことが必要なのではないだろうか。

いま、多くの若者の間ではネット環境に頼りすぎて様々な問題や事件を起こしてしまう報道が毎日のように流れている。メディアの発達により子どもたちの周囲ではバーチャルリアリティー（コンピューターを使って人工的な環境を作りだし、あたかもそこにいるかのように感じさせること）の世界が広がっている。自ら考え善悪の判断をし反社会的行動の抑制をするという自律心の欠如。自らの行動に対して将来を予想することができる想像性（imagination characteristics）や自意識の欠如。様々な困難に対して主体的に関わろうとする意欲や問題解決意識（solution to problem awareness）の欠如。人とのかかわりを大切にするコミュニケーション能力の欠如。そして無気力、無関心などがあげられるのではないだろうか。

ではそのような現代社会環境に生きている幼児にどのような環境を与えることが生きる力の育成につながるのだろうか。ここでは幼児が豊かな自然のなかで行われる実体験を通し五感をフルに

使って様々な活動体験をすること。特に日常的に使っている視覚だけでなくその他の感覚を使うことの重要性に着目してみた。それだけでなく自然の中での遊びを通し、様々な困難に遭いながらも友だちの存在を意識し、友だちとの協力や自らの力で困難に立ち向かおうとする力が身についていくと考えられる。そこで日本においても様々な団体等によって行われている「森のようちえん」活動を取り上げその中で行われている幼児の実体験がどのように生きる力につながっていくのか考察していきたい。

森の幼稚園

森の幼稚園とは特定の幼稚園の名称ではなく雨の日も雪の日も森での活動を行う幼稚園全体をさしている。1950年代の半ばデンマークの一人の母親エラ・フラタウが自分の子どもと共に近所の子どもたちを預かり、保育のために森で遊ばせることから始まった。その後、親主導の「stovbomehaven：デンマーク語で森の幼稚園」が設立された。その後ドイツやスカンジナビア全体に森の幼稚園活動が広がり、特にドイツでは爆発的に広がっていき、2011年8月現在で496園の森の幼稚園（wald kindergarten）が存在しているそうである。森の幼稚園には2種類あり、園舎を持たず毎日森へ出かけて遊ぶ幼稚園と、基点となる園舎があり屋外活動の一環として森での保育を行うところがある。また、日本においては森の幼稚園に関する著書はまだ少なく、1995年版で石亀泰郎氏の写真集「森のようちえん」が最初でありデンマークの森の幼稚園を紹介している。石亀氏はその後、「さあ、森のようちえんへ・小鳥も虫も枯れ枝もみんな友だち」という写真集を出版している。2002年以降、森のようちえんに関する論文等も発表されるようになり、2003年にはドイツ在住の翻訳家であり、環境ジャーナリストの今泉みね子氏による「森の幼稚園・シュテルンバルトがくれた素敵なお話」の中で幼児が森の幼稚園に

参加する中で成長していく過程を物語として紹介している。

森のようちえんの表記と理念について

岐阜大学教育学部准教授の今村光章氏はその著書の中で、日本における森のようちえんに対しての研究で「森のようちえん」という表記について考察している。今泉みね子氏の著書には「森の幼稚園」と漢字で記載されているが、全国森のようちえんネットワークを中心に「森のようちえん」と平仮名で表記されている。今村氏によると森のようちえんという表記は日本において子どもたちが読めるように平仮名にしてあるという。さらに、日本においては「森のようちえん全国ネットワーク」の影響が大きく、そのホームページによれば日本語の森のようちえんとは「自然体験活動を基軸にした、子育て、保育、乳児・幼少期教育の総称」と定義付けられている。さらに森のようちえんは学校教育法による幼稚園だけでなく認可保育所や認可外保育所、託児所、学童保育、自然学校、育児サークル、子育てサロンや子育て広場などが含まれるという。その中で森の幼稚園と漢字で表記すれば学校教育法による幼稚園と混同される恐れがあるということで表記を平仮名にしているそうである。また、漢字に比べて平仮名の方が柔らかい感じを与え森のようちえんも柔軟で優しいといったイメージを与えるため平仮名表記が好まれているとも考察している。しかし、ドイツの言語はwald(森) kindergarten(幼稚園)と表記されているため漢字で幼稚園でもかまわないと思うが幼稚園以外の施設や団体への配慮も含まれているのではないだろうか。

日本の森のようちえんとしては様々な団体が行っているが、次の理念を掲げて森のようちえんが運営されているところが多い。①自然と親しむ。②遊びこむ。③自主性を養う。④友だちや大人、動植物とかかわる。⑤保育者と保護者がありのままの幼児の姿を受け入れ、幼児の育ちを信じて待

つ姿勢を重視するとともに育ちあう。とある。また日本においての森のようちえんはだまかに3つの類型に分かれている。①通年型森のようちえん：特に園舎を持つことなく毎日森に出かけ一日を過ごす。自主保育も含まれ保護者も保育者と共にかかわる内容。この活動をおこなう団体そのものを森のようちえんとして捉えている。②融合型森のようちえん：基点となる園舎を持ち、幼稚園生活の大半は園舎を中心に過ごす。幼稚園生活の中に積極的に野外で遊ぶ時間を取り入れる。カリキュラムの一環として森の幼稚園を保育活動として捉え、月に数回とか週数回というように定期的に保育の中に取り入れている園が多い。③行事型森のようちえん：NPO法人等が運営し、森の中での活動を非日常的として捉え、月に一度や週に一度などイベント的に森等野外へ出かけていって行われることが多い。森のようちえんを自然体験のための手段として捉えている。（今村光安章 編著 森のようちえん 解放出版社 参考）

木の実幼稚園で行われている森の幼稚園（幼児教育としての幼稚園なので以後漢字で表記する）は上記の類型で言うと融合型と言っても良いだろう。では木の実幼稚園の森の幼稚園での園児の関わりについて考察してみたい。

前橋市粕川町にある木の実幼稚園では教育課程の中に森の幼稚園活動を組み込み、様々な保育形態とともに自然体験活動の一つとして重要な位置を占めている。年間行事計画の中にも明記され毎月2回の森の幼稚園を計画し、自然体験を通して生きる力の育成を目指している。木の実幼稚園における保育の理念として①挑戦する意欲②人との信頼関係③思いやりの心④命を知る⑤我慢する心⑥考える力⑦目的意識の7つの理念を掲げ教育目標としている。

平成8年（1996年）6月に園児の探検遊びがきっかけで徒歩15分程度で行ける近くの里山に野外教育施設として自然体験場をつくり、以後自然体験を取り入れた子どものための遊び場とするため

の環境づくりをしている。（遊びの森キャンプ場と命名）いわゆる里山であるが敷地の広さ6000坪の雑木林にロープ等で作った冒険的な遊具やツリーハウスが設置してある。大人から見ると危険と思われる要素があるが子どもにとっては挑戦意欲をそそるような内容の遊具である。敷地内の中央には小さな小川が流れサワガニ等の希少生物も生息している。地形は起伏に富んでいて平坦な地形のほか坂道や崖などが多くあり、子どもたちは自由にその中で遊びまわる。この遊びの森は森の幼稚園として使用するだけでなく毎月2回第2第4日曜日に冒険遊び場プレイフォレストとして広く一般に開放している場所でもある。こちらは幼児だけでなく広く一般に開放し小学生を中心に自然の中で冒険遊びをしている。冒険遊び場活動も「森のようちえん全国ネットワーク」によると森のようちえん活動の一つになるのだろう。

感性 sensitivity

木の実幼稚園での森の幼稚園は毎月2回行われる。朝、登園して全園児が集まるとすぐに身支度をして弁当を入れたリュックを持ち門の前に並ぶ。なるべく年長児が年下の子どもと手をつなぎ15分ほどの道のりを一緒に歩いていくのだが、草花や虫たちを探しながらだらだらと歩いていくので時間がかかることもある。しかし、そこには様々な発見があり、驚きがあり、不思議がたくさん隠れているのである。様々な形をした木の根っこが落ちていたり、大きな葉っぱ、いろいろな色の



葉っぱ、落ちている木の枝、ドングリや松ぼっくり、不思議な色の虫やキノコたち、きれいな花や匂いのする花など、森には子どもたちにとって魅力のあるものがたくさん存在している。森の幼稚園からの帰り道は子どもたちの両手は木の枝や葉っぱ等が持ちきれない程になり、ポケットの中には木の実や石ころなどがぎっしりと詰まっている。子どもたちにとってはただのガラクタではなく、とても素敵な宝物なのだろう。子どもたちは道草を食いながら自然に触れて歩いていくことでますます自然に対しての感性を磨いているように感じる。レイチェルカーソンは著書センスオブワンダー（不思議さに驚嘆する感性）の中で「知ることは感じることの半分も重要ではない」と言っているように子どもたちは自然の中で五感を通して感じることで、自らの感覚をさらに鋭くしていくことができる。夜の森へ入ると森の奥では何かうごめいているような感覚に陥ることがしばしばある。また、驚くような自然の色や自然の形に出会ったとき、何でだろう。不思議だなあ。と感じる心。そして驚きの心。何か大きな力がそこに働いているような感覚。子どもたちはそのような感覚に陥った時、真に畏れを感じるのである。この畏れは子どもたちにとって、とても大切な感覚で自然に対して好奇心を持つようになり、その好奇心が探究心へ変わり、意欲へと発展していくのである。そしてすべてのものにありがとうと言う感謝の気持ちを持つことができる。まさにセンスオブワンダーはこのことを言っているのであると感じることができる。

自由の中の規範意識 model awareness in the freedom

遊びの森に到着すると園長から話を聴いてから教師の合図により、それぞれ好きな遊びを探して森の中へ散らばっていく。森の中ではきまった遊びがないので、それぞれが思い思いの遊びを探し始める。ここでは創意工夫が必要になり子どもた

ちは遊びを創り出すという創造性を身に付けていく。また、遊びの森の敷地だけでも6000坪、その周囲も広い森なので自分勝手に遠くまで行ってしまうと危険性も大きくなる。そこで教師との事前の約束が必要である。「先生たちの声の聞こえないところまではいかない事」と約束をすることで子どもたちはとんでもなく遠くまで行ってしまい迷子になることなどはない。このような約束事を作ることで規範意識をもって自由に遊ぶことができる。自由とはそのようなものであり、決して自分勝手とは違うのであるが、自由と自分勝手にの違いを混同してしまい自由とは放任であると同義付けてしまう人も少なくない。子どもたちがある程度の規範意識の中で自らの意識や行動をコントロール（自律性）していくことで自由に活動することができるのであると考える。森の中には起伏に富んだ地形があり、ロープでつくった冒険的な遊びも多くある。危険性もあると感じるが子どもたちには大きなけがはない。あえて危険な環境の中に身を置くことで危険に対する自己防衛能力が身に着くようだ。切り傷擦り傷は毎回のようであるが大きなけがは今まで見られない。以下、遊びの森での主な危険と思われる遊具を紹介すると

① ターザンロープ

小川が流れる谷に樹木を利用してターザンロープが設置してある。滑車に付けたロープにつかまって谷を渡るが、高さ最大で6メートルほどになる。大人がたっても高くて怖いと感じるので幼児が初めて挑戦するときにはその高さに立ちすくんでしまう。周囲の子どもたちの声援を受け思い切って足を離すとすると谷を渡っていくことができる。多くの子がワーッと叫びながら滑っていくが反対側に無事到着すると、必ず振り向いてにこっと笑い「もう一回やる」と言って崖をよじ登ってくることを繰り返す。一度恐怖心に打ち勝ち、達成できるとやってみようという「意欲」を身に付けることができるようだ。

② 巨人のハンモック

林間に四方4メートルほどの網を高さ3メートルに樹木の幹に縛り付けた大型のハンモックのようなものである。ハンモックは耐荷重が強く園児が10人以上乗っても全く問題がない。園児は縦横無尽にハンモックの上を走り回ったり飛び跳ねたりすることができるが高さがあり落下する可能性もある。

子どもたちが考え出した遊びに「ありじごく」というものがある。ハンモックの周囲に子どもたちがしがみつき中央で教師（大人）が飛び跳ねてしがみついている子どもたちを中央に落とすという内容である。大人は疲れるが子どもたちの大好きな遊びの一つだ。自ら遊びを考創りだす創造性と創意工夫がみられる。



③ モンキーブリッジ

やはり谷の樹木を利用して3本のロープで作られたモンキーブリッジという橋がある。ロープだけなので安定せずゆらゆら揺れるが、手を放さ



なければ地面に落ちることはない。子どもたちは何往復もするが必ず渡る順番を守らなければならない。ふざけて手を離せば落ちてしまうがしっかりとロープをつかんでいれば決して落ちることはない。

④ 木登り

特に遊具というわけではないが子どもたちは木登りが大好きである。遊びの森には様々な種類の樹があり、子どもたちは登りやすい樹を見つけて登る。樹の曲りや枝などに足の裏をしっかりとかけて上手に登っていく過程で、どの枝につかまれば登れるのかどこに足をかければ登れるのか考えながら登らなければならない。そこで子どもたちは考えることを覚え木登りのコツをつかんでいく。ただがむしゃらに登ろうとしても中々上ることはできない。

⑤ 探検遊び

子どもたちは探検遊びが大好きである。ここでいう探検とは篠やぶなどの道の無いところを歩き回るだけであるが、びっしりと生えた背丈以上ある篠やぶをかき分け進んでいく。視界もさえぎられるほど密集した篠やぶを歩いていくことは子どもたちにとってかなりのストレスを感じる場所である。しかし、子どもたちはこの遊びが大好きである。篠藪をかき分け進んでいくうちに様々なものを発見する。変わった形の樹木の枯れた根や名前のわからないキノコや時には狸の排泄場所など



にも遭遇することがある。そして篠やぶから抜け出した時の解放感と安心感が何とも言えず心地よい。また、一人で勝手に行動してしまうと方向性さえ分からなくなってしまうので集団行動をとらなければならぬ。また年長児が年下の幼児を気にかけて手助けしながら進んでいく姿も見られる。

事例①

2月の森の幼稚園。風花がちらつく寒い日である。大好きな探検遊びに行くことになった。13人ほどの年長児から年少児までが集まった。途中入園して間もないB子にも声をかけると無言でついてきた。友だちとの関わりが少なく不安な表情で、教師の手をぎゅっと握って探検についてきた。堰堤の上を歩き水の無い水路を下って篠やぶの中へ入る。びっしりと生えた篠やぶの斜面を登り倒木の下をくぐっていく。「まだつかないの～」と女の子が不平を言いますが、普段はあまり活発でない年少のA男は目をキラキラさせて「たのし～」と言いながら後をついてくる。やっと篠やぶから抜け出しキャンプ場に続く道に出ると開放感に満たされる。「もっと探検に行きたい」とA男が言うのでさらに別の篠やぶへ入っていく。30分ほど歩いていくと、わずかな空間があったので秘密基地を作ろうと提案する。子どもたちもよし作ろうということになり、切った篠を一本一本地面に突き刺していく。子どもたちもよく手伝ってくれ篠で囲いを作って家に見立て完成した。B子は壁に飾るんだと葉っぱを集めてきて上手に壁に飾っていた。また、「椅子もあるといいね」と話友だちと一緒に篠やぶの中へ入っていく。それぞれが協力しながら秘密基地を制作する姿が見られた。基地を完成させたところで昼食の時間になったのでキャンプ場へ戻ってくる途中でB子が目を輝かせ「あ～たのしかった」と一言つぶやいたことが印象的だった。

⑥ ツリーハウス

森の中には手作りのツリーハウスがある。高さ2メートル以上の木の幹にデッキがありそこに小さな小屋が造ってある。子どもたちは高いところが大好きであるので、当然ツリーハウスは人気がある。子どもたちにとって隠れ家的な存在になっているようである。そこには教師の指導は入らず子ども達だけの世界を共有しているようだ。お昼のお弁当もツリーハウスで食べることもあり、仲間関係も深くなってくる。



時間と自由の保障

森のようちえんではこのように子どもたちの自由と遊びが保障されなければならない。大人目線から見ってしまうと危険な事に対して子どもを遠ざけようとする傾向が強い。危ないからあれをやってはいけない。これをやってはいけない。と子どもの遊びが規制され禁止事項が多くなってくる。そうなる子どもたちは大人を目線を気にし始め自ら取り組もうという主体性がなくなり意欲の欠如が見られてくる。しかし、大きなケガをされても困るわけである。冒険的な遊びを保障するためには危険の意味をしっかりと捉えていなければならない。それはハザード (hazard) の危険とリスク (risk) の危険の違いである。ハザードは自然災害や老朽化などによる倒壊などの自分が気を付けても避けられない危険の事であり、リスクは自分が気をつけさえすれば避けられる危険の意味が

ある。ハザードの危険はあってはいけないことで遊具の安全点検や危険個所の把握などしておく必要がある。リスクについては遊びや森などでは自分が気を付けて遊べば避けられる危険のことであり、子どもたちにとってはやってみたくてという意欲を身に付けるための危険であることを知っておきたい。リスクの危険が伴う遊びについてはある程度必要であると考えている。しかしそれには教師の十分な準備と見守りながら幼児とかかわる配慮や観察力、及び危険を見分ける洞察力が求められる。

また、もう一つ保障されなければならないものが時間である。森のようちえんでの一日は、森に到着してから遊びはじめ、お昼になると一度集まり各自の好きなところでお弁当を食べる。そして食べ終わると各自でごちそうさまをしてから遊び始め、午後2時までには幼稚園に戻らなければならないので1時半ごろには片付けて集合し森を後にする。日常生活の中ではどうしても時間に制約されてしまう事が多い。そうすると子どもたちは時間を気にしてしまい遊びに集中することができない。ゆったりとした時間が保障されることで時間を気にせず遊ぶことに集中できる環境になるのではないだろうか。そのような環境の中で子どもたちには物事に取り組む意欲と集中力が育っていくと考える。しかし園に帰る時間が近づき、帰る準備を始めると子どもたちから「もっとあそびたい」という声も聴かれることもしばしばである。幼稚園の教育課程の中での時間の制約を感じてしまうことも事実である。子どもたちの「もっと遊びたい」という叫びは遊びに対する意欲の表れであると感ずる。

このように森では様々な体験をすることができる。メディア等の関わりの中でバーチャルリアリティを体験するのではなく実際に五感を使って、実際に見て、触って、においを嗅いで、食べてみて、音を聴いてということが実現できるのである。子どもたちはこのような体験を通し、ますます感

性を身に付けることができると考えている。実際に五感を使ってどのようなかわりがあるのか考察してみたい。

視覚

遊びの森は雑木林で四季の移り変わりがはっきりとしている。春は新緑が眩しいほど気持ちよく山桜の花が真っ白に咲く。夏は緑が濃くなりエゴノキの花が地面に落ちて真っ白な絨毯のようになる。秋には紅葉で黄色や赤色に色づき、真っ赤な毒々しい色をしたキノコもよきによきと顔を出す。冬には木の葉が落ちて、森の色が一気に暗くなる。その中であつてもすでに小さなつぼみがついているのを見ることができ命の存在を感じることができる時期でもある。

触覚

森には不思議なものがたくさんある。山ナメクジは大人の親指の3倍ほどの大きさになり触ってみるとぬめぬめとした感触が何とも言えない。秋になると山栗がたくさん落ちてきて手で触ろうとすると痛い目に合う。また、大きな芳の葉はカサカサでうちわ代わりに使うこともできる。沢の水は夏でも冷たくとても気持ちいい。その中に生息している沢蟹を捕まえることは子どもたちにとって緊張するが慣れてくるとうまく捕まえられるようになる。また、沢沿いの土は粘土質のものが多くどろ団子にするととても上質のどろ団子ができるので子どもたちはどろ遊びも大好きだ。冬の森の道の霜柱をがザックザックと踏みつける感触も楽しい。

嗅覚

子どもたちは「森のにおいがする」とよく言うことがある。特に森に匂いがあるわけではないが良く考えてみると森の匂いとは、春の新緑の中に入ると気持ち良いさわやかな雰囲気がある。夏にはむしむしとした感覚。その中にも風が通るとと

でも涼しい感覚を感じる事ができる。冬にはキーンとした張りつめたような寒さ。このような雰囲気（感覚）をにおいと表現しているらしい。またその他、キノコなどの菌類の匂い。森へ行くとよく焚火をするが煙の匂いなどを「森のにおい」と表現している子もいる。

味覚

森には様々な味覚がある。春には山菜であるタラの芽、ヨモギの葉っぱ、これらは収穫するとその場で天ぷらにして食べることがある。夏になるとモミジイチゴの実がたわわに実り甘酸っぱい味を楽しんでいる。秋には甘いアケビに実がなるが高いところに実がつくので子どもたちがとるには難しい。濃い甘さの中にもわずかな苦みと青臭さがあるため子どもにはあまり人気がない。また山栗がこのころになると落ち始めこりこりした食感も楽しめる。何となく甘みを感じ市販の栗より味が濃いように感じる。晩秋になると原木にシイタケ菌を植えたためシイタケの収穫もできる。たき火をでシイタケを網の上で焼くと香ばしくキノコ嫌いの幼児でもおいしそうにシイタケにかぶりつく。

聴覚

森には様々な音がある。様々な鳥の鳴き声、夏には蝉の鳴き声がうるさいほど聞こえる。夕方5時ごろに必ず聞こえてくるのがヒグラシの鳴き



声である。しばらくすると鳴き止み朝方4時ごろに再び鳴き出す。日中はアブラゼミやミンミンゼミの鳴き声で森がおおわれる。静かな日に耳を澄ますとざわざわと風に揺られる木々の擦れあう音や小川のせせらぎが聞こえてくる。時々、コンコン、コンコンと何かをたたくような音が森に響くがこれはコゲラが木の幹にくちばしで穴をあけている音である。キャンプの時など夜になるとギ〜という不気味な鳥の鳴き声が森に響きちょっと不気味な感覚を覚える時もある。

最後に

森のようちえんにおいて子どもたちは人間として生きるための術を学んでいるように感じる。入園当初、性格的にも消極的だった幼児が森での遊びを通して色々な事に挑戦するようになってきた。異年齢の中での助け合いも見られ、友だちを意識し協力することの大切さ、思いやりの気持ちなども学ぶことができる。森では教師が主体となり指導することはほとんどない。教師は子どもたちが危なくないようにそれぞれの場所に配置し子どもたちの遊んでいる様子を見守るように配慮している。どちらかというと教師自身が楽しみ、子どもたちと友だち関係を築くようなかかわり方が多い。しかし、遊びに集中するのではなく森の中の危険性をしっかりと把握しておくことが必要とされる。遊具の事前点検や危険個所の把握などは教師全体で共通理解が必要である。森の中には危険生物や危険植物も多い。マムシやスズメバチなども生息している。また食べては危険なキノコ類やタケニグサ、クサノオウ、マムシグサやトリカブト等、食べたり触ってはいけない物などもたくさんある。教師が知識として危険なものを知っておくことは大切である。

しかし、森の中でこれらの危険要素を取り除くことは難しい。囲まれた園庭や室内であるなら可能かもしれない。しかし、冒頭で記述したように子どもたちにはリスクの危険を通して大きく成長

できる部分も大きいのである。幼児はこれらの危険に向き合っていくことで回避能力などの知恵を身に付けていくことができるのではないだろうか。森の中で遊ぶということは子どもたちが知恵を身に付け感謝や驚き等の体験を通し畏敬の念を持つこと、主体的に遊びに関わることにより色々な事をやってみたいという意欲を身に付け、友だちとの共同的なかわりを通して友だちを意識し人間関係の構築を行っていくことができるなど幼児に生きる力の基礎となる心情・意欲・態度を身に付けていくのであると考える。

自然体験を通して学ぶことが大きな教育効果を生み出すことは多くの研究成果として挙げられているが実際にはまだまだ認知が少ないように感じる。近年、森の幼稚園という活動が北欧やヨーロッパをはじめ日本においても広がってきている。徐々に興味を持つ保護者も増えてきているようである。しかし、教育というと学校教育の教課的な内容を想像してしまう教育関係者も少なくなっている。どうしても大人が主導してしまう保育になってしまう傾向がある。しかし、森のようちえんで

は子どもたちが主体的に活動できる場であると考えられる。自然の中で幼児が主体的に物事にに関わり、協同的なかわりを通して自らの感性を高め、していくことができる森の幼稚園活動がもっと広がれば幸いであると考えられる。

参考文献

- ・森のようちえん 自然の中野子育てを
今村光章 編著 解放出版社
- ・さあ森のようちえんへ 小鳥の虫も枯れ枝もみんな友だち
石亀泰郎 ぱるす出版
- ・森の幼稚園 シュテルンバルトがくれたすてきなお話
今泉みね子 アンネッテマイザー 著 合同出版
- ・幼稚園教育要領解説
文部科学省
- ・The Sense of Wonder (センスオブワンダー)
レイチェル・カーソン 上遠恵子=訳 佑学社

